

札幌フロラ（植物相）調査の着手

— 北大キャンパスの例 —

原 松 次

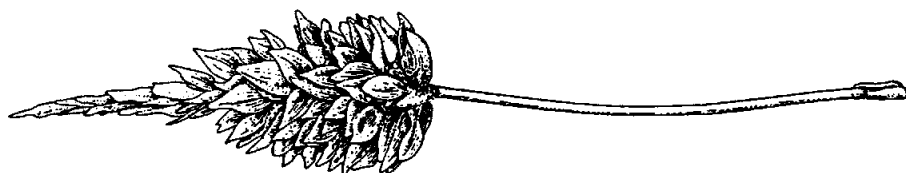
会長提案の本件（友の会便り№5, 62.4.27）については、第2回定例講演会（62.12.19）の席上お話ししましたように、会員数名からなる実行班が5月から10月まで毎月3回をこれにあてました。当初期間は一応3か年を予定したのですが、南区の高い山からビルの谷間の街、さらに北区、白石区の元泥炭地などなどを歩いているうちに考えの甘さを知らされました。すでに諸先輩の手になる資料は部分的にはあるのですが、それはそれとして、現札幌にキク科からシダ類までどんな草や木が何種ぐらい野生しているのかをつかむのが目的なので、まとめを急がずじっくり取り組むのが正道でしょう。

ここでは中間報告の1例として灯台もとの北大キャンパスをのぞくこととしました。広大な敷地はナガハグサの芝生が大半を占め、その他自然林のいわゆる「原始の森」、遺跡保存庭園、第二農場（ここに重要文化財指定の家畜舎などがある）、池、そして荒れた放置地で構成されている。これらの地域にある植物のうち栽植ものは別として、自生種と帰化種の総数は約260、その内容は帰化約27%と高く、樹木は17%位となっている。ハルニレ、ヤチダモ、ハンノキの大木と共にカラコギカエデが茂り森の下草としてヒメザゼンソウ、アズマイチゲ、ミズバショウ、オオバナノエンレイソウ、クロユリ、キバナノアマナ、エゾエンゴサク、ヤブケマンなど健在であり、一方セイヨウタンポポ、オオハンゴンソウ、オオアワダチソウ、オオスズメウリ、イワミツバ、ドクニンジン、オオスズメ、テッポウなどわがもの顔にばっこする帰化植物が

ある点をここの特徴としてあげることができるであろう。

なお興味深く思った水草にふれておきたい。工学部の南側に大きい人工池がある。そこには花どきが見もののヒツジグサ（またはスイレン、大半は園芸品種）以外にガマ、ミクリ、クワイ？、ウキクサ、タヌキモ、ホザキノフサモ、イトモ、ホソバノミズヒキモそしてエビモがある。この植生は一見不思議であるが、周知のようにこの場所がかつてのキャンパス内を蛇行していたシャクシ（サクシ）コトニ川の沼湿地（今も湧泉がある）であったことを思えば十分うなずける。事実園芸種スイレンとクワイ？を除く他のすべては篠路か東米里との共通種である。（北大正門から入った道路の下を右手の百年記念館へ通じ流れている水は今日ではモーターアップしたものでシーズン中のみ）。

最後にミズバショウ（10数株ある）について記録しておきたいことがある。夏のある日森を訪ね、あの堂々たる葉を勢いよく展開している根本のくぼ地に目があったとき水が光った。おかしいぞとつぶやきながら近づきよく見たら、そこに小さい配管が横たわっていた。恵迪寮跡の野球場施工の際、60年、施設部のいきなはからいによるものと思われる。これは数ある大学のうち北大キャンパスのみにある「原始の森」に対する北大本部の高い評価の表われであろう。この実例からして「原始の森」の保全は実証されているとみることでうれしい。



ホロムイスゲ